

令和3年度 奈良市立鳥見幼稚園 研究実践概要

園長名 林 三代
全園児数 30名

1. 研究主題

「なかまと共に主体的に活動する子どもをめざして」
～子どもの心の動きをとらえて～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

園児は、明るく人懐っこい子どもが多い。話すことは、大好きだが、話を聞くことには苦手さを感じている様子が見られる。色々な遊びに興味を持ち取り組むが、子ども同士でアイデアを出し合い、繰り返し試したり、工夫して遊んだりすることに苦手さを感じている子どもが、多いように感じられた。このような姿から、保育者は幼児を理解する目を育て、環境構成や援助の仕方について学び、「なかまと共に主体的に活動する力」をもった幼児を育てていきたいと考え、この主題を設定する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

「幼児の姿と成長の過程」「したい気持ちや力を存分に発揮できるような環境」「主体的な活動を促す保育者の関わり」について探ることで、保育者の資質向上を図り、豊かな心を持ち、自分の思いを伝える力、友達の思いを分かる力、工夫したり試したりしながら最後までやり抜く力、なかまと共に主体的活動しようとする子どもの育成を目指す。

②研究の重点

- ・研究主題について研修を行い、教員相互の共通理解を深め研究を深める。
- ・幼児の姿から内面を理解し、主体的に活動するための環境や保育者の援助及び指導のあり方について、常に自分の保育を振り返り、計画的、継続的に実践する。

③活動の方法

- | |
|--|
| <p><input type="radio"/>—ねらい _____—子どもが考えたり主体的に活動したりする姿</p> <p><input type="checkbox"/>—主体的な姿につながる要因</p> |
|--|

【事例1】「きもちいいね」 4歳児 5月

- 友達や保育者と関わりながら、興味を持った遊びを楽しむ。
- 感じたことや思ったことを言葉や態度で相手に伝えながら遊ぶ。

砂場の枠をスコップで掘り起こしておく。C児が枠の存在に気づき、その上に水を流

す。D児も一緒になって水を流し始める。水が溜まっていく様子を見ていたB児が、柀の上に立ち、笑顔を見せる。

A児がB児の元にやって来て、水の中にそっと足を入れ「なんかあったかい」とつぶやく。続けて、今度はB児に向かって「なんかあったかいね」と話しかける。B児はA児の言葉に「うん」と笑顔で返す。「座ってみようよ」としゃがむA児を真似て、B児も柀の上にしゃがむ。「すわってもあったかいね」「きもちいいね」と顔を見合わせながら笑う。保育者がA児B児のそばに行き、「2人で何してるの」と声を掛ける。A児B児は立ち上がり、「ここはあったかいから温泉だよ」「足温泉だよ」と再度顔を見合わせ、互いの言葉に頷き合う。

(評価・反省)

- ・友達や園での遊びに興味を持ちにくかったA児とB児が、友達の遊ぶ姿をきっかけにして、遊びの場や友達に自分から関わってみようとする気持ちが生まれた。
- ・A児B児が関わり始めた際に、保育者がすぐに声を掛けずに見守ることで、子ども達だけで水の中が「あたたかい」ことに気付いたり、一緒に「しゃがんでみよう」としたりする姿につながった。

【事例2】「たいこを鳴らしたい」 4歳児 12月

○友達と遊びのイメージを膨らませ、同じ目的を持って遊ぶ楽しさを味わう。

○思いや考えを出し合う中で、相手の良さに気づき、受け入れる。

A児とB児が「今日はどんなコースにしようかな」「曲がるコースにしようかな」と相談しながら、複合遊具のそばに準備してあった長さの違うトイやビールケースを組み合わせ、転がしコースをつくっている。コースができてくると、複合遊具の上にあるスタート地点から、A児がドングリを転がし、B児は「ここがずれているよ」「もうちょっと動かすね」とトイやビールケースの位置を調節している。ドングリが2人で決めたゴール地点にたどり着くまで、繰り返し取り組んでいた。何度目かで成功すると、2人でドングリだけでなく、ビー玉やカプセルも転がし、どれが一番早く転がるかを比べて楽しむ。

そこにC児がやって来て、ゴール地点に置いてあったバケツをプラスチックの積み木に変えてしまう。それに気付いたA児は少し声を荒げながら、バケツを動かさないでほしい気持ちをC児に伝える。C児もなぜ動かしたかを自分なりに言葉にして伝えるが思うように伝わらない。そこで保育者がそれぞれの言葉を補い、伝えることでA児はC児にも何か思いがあるのだろうということに気付く。

C児がドングリを転がすと、積み木に当たり「コン」と音が鳴る。A児が「すごく良い音!」と喜び、B児も「音が鳴るの、太鼓みたいだね」と言い、C児のプラスチックの積み木をゴール地点に置きたいという気持ちを受け入れる。2人の言葉を聞いたC児は「そう!これ(積み木)は太鼓だよ」「ここ(ゴール)に太鼓を置いて鳴らしたかったんだよ」と嬉しそうに伝える。その思いを受け止めたA児とB児、そしてC児の3人で繰り返し転がし遊びを楽しむ。

(評価・反省)

- ・A児、B児は日頃から一緒に転がし遊びをする中で、今までの経験から共通の目的を

持ち、言葉でやり取りしながら協力して遊ぶことを楽しんでいて、試行錯誤しながら完成したコースで遊んでいる時に、C児が断りもなく、バケツを積み木に変えたため、最初は受け入れることができなかったが、言葉だけでは伝わりきらなかった思いを実際に目にするので、C児の意図をA児、B児なりに理解し受け入れることができた。

・言葉だけでは自分のイメージしたことを十分に伝えることができなかったC児が、A児の「すごく良い音」、B児の「太鼓みたい」と言う言葉を受け、自分の気持ちを明確に表すことのできる表現を見つけることができた。

・C児が断りもなくゴール地点のバケツを積み木に変えた際に、A、B児に声を掛けるように伝えるべきか迷ったが、まずはC児の思いを尊重することに決め、介入しなかったことで、友達の思いに気づき、受け入れることにつながった。

【事例3】「砂の城をつくろう」 5歳児 10月

○自分のイメージした城をつくることを楽しむ。

○遊ぶ中で砂や水の特性や道具の扱い方に気づく。

先月から砂山を城に見立てて遊んでいるA児。スコップで砂を掘ったり、手で押して固めたりしながら砂山をつくって遊び始める。A児「大きなお城にしたいから、山も高くして、砂もしっかり固めないとね」と、保育者に話す。「山に少し水をかけたらどうかな」と声をかけ、A児の近くに水の入ったジョウロを置く。A児はジョウロで砂山に水をかけ、「固まってきたね」と、嬉しそうにする。繰り返し、スコップで砂を返しては手で押し固めて砂山をつくる。A児「できた」と、山がつくれると、今度は円錐の型を使って形をとる。一つ型をとっては、その横にも同じ型をとってどんどん並べていく。A児に「三角の形(円錐)を並べるときれいだね」と、保育者が声をかける。「これ、お城の壁だよ」と、A児は砂山の周り全部に円錐の型をとった。保育者「お城の壁なんだね。すごいね」と、A児や他児にも聞こえるように声をかける。

そこへ、近くで遊んでいたB児が「一緒にお城をつくろう」やって来て、一緒にバケツに砂を入れる。A児はバケツ一杯に砂を入れると両手で持ち上げ、砂場にバケツをトントンと叩きつける。バケツ一杯に入っていた砂は叩きつけたことで少しかさが減り、バケツ上部に空間ができた。A児はその空間がいっぱいになるようにさらに砂を入れる。A児「いくよ。いっせいのうで」とバケツを裏返ししたり、バケツの底をフライ返しで2、3回叩いたりする。その様子をB児は、じっと手をとめて見ている。バケツを上まで持ち上げて形ができているか見ると、少し壊れていて残念そうにする。

B児「もう一回やってみる？ちょっと砂と水を混ぜたらどうかな」と、先程と同じようにバケツに砂を入れ、最後に砂の上の部分に水たまりができるくらいジョウロで水をかける。A児とB児は一緒にバケツを裏返し、フライ返しでバケツの底や側面を数回叩く。バケツを持ち上げるが、B児「あれ、砂が出てこないな」と、不思議そうにする。B児「ちよっと水を入れすぎたかな」、A児「今度は水を少なくしたほうがいいよね」と、話す。「いっせいのうで」と声を合わせて、バケツを裏返す。B児「できてるかな」と、楽しみにバケツを持ち上げる。今度はきれいに型がとれ、「きれいにできた」と、嬉しそうにしていた。

(評価・反省)

- ・A児が繰り返し城づくりに取り組んだことで、道具の扱い方に気付いたり、城づくりが広がったりした。
- ・最初はA児が城をつくって遊んでいたが、保育者が他児にも聞こえるように声をかけたことで、B児と一緒に考えたり、力を合わせたりしながら城をつくることができた。その中で、砂や水の特性やきれいな型をとることができる方法に気付いたりすることができた。

【事例4】「どんなふうに飛ぶかな」 5歳児 12月

- 自分なりに試したり、工夫したりしながら弓矢を飛ばして遊ぶ。
- 矢を的に当てたり、飛ぶ距離を競ったりしながら遊ぶことを楽しむ。

丸や星形の的、弓矢や的などを置いておく。A児「いくで」と、的をねらってストローの矢を放つ。「飛んだけど、的には当たらなかった」、保育者「でもここまで矢が飛んだよ」と、A児が飛ばした矢の近くに行く。A児はもう一度、輪ゴムに矢をひっかけて思い切り引っ張って放つ。矢は的の少し横を通して地面に落ちる。A児は「もう少しやったな」と、残念そうにする。

A児が残念そうにしている様子を見て、「どうしたん？」と、B児がやって来る。A児「的になかなか当たらんねん」、B児「じゃあ、的の近くからやってみたら」と、伝える。A児「それいいな」と、的の近くから矢を飛ばす。B児はA児が放った矢が的に当たるかじっと見る。B児「当たった10点」A児「やった」と、嬉しそうにする。

繰り返し試すA児は今度は少し後ろから矢を放つてみることを考える。B児「はっきよいのこったって言ったら始めてな」と、考えたことも話している。B児の「はっきよいのこった」のかけ声とともに、A児が矢を放つ。B児「ここやった」と、矢が飛んだところを指さす。A児「的まで届かなかった。今度は当たるかな」と、繰り返し挑戦しようとする。A児「準備できた」、B児「いくよ。はっきよいのこった」と、A児は的に向かって矢を放つ。矢は的の手前まで飛ぶが当たらない。B児「でもさっきより飛んだで」と、A児に伝えていた。

その後も「友達よりも遠く飛ばしたい」と、弓矢をよく飛ばようにつくり直したり、自分なりに矢を放つ方法を工夫したり、試したりしながら遊んでいた。

(評価・反省)

- ・素材でつくった弓矢を使って矢を飛ばして遊ぶ。繰り返し遊ぶ中で、どのようにしたら矢が遠くまで飛ぶかや、的に当たるか気付くことができた。B児が「はっきよいのこった」のかけ声をかけたことが励みとなり、目標をもったり、どこまで矢が飛ぶか繰り返し試したりして遊ぼうとする姿に繋がった。

5. 研究の成果

- ・子ども達が夢中になって遊びこむためには、一人一人の遊びに対する関わり方や思いを丁寧にくみ取り、遊びのどこに興味や関心があるかを見極める力が必要であることを改めて感じた。
- ・子ども達の育ちを見据えた保育内容の工夫や、一人一人に応じた援助、じっくりと取り組める場や時間を保証し、自ら選択できる環境構成の必要性を実感した。
- ・子どもの思いが実現できるように、保育者間で共有する時間を持つことや、子どもの思いに耳を傾け、一緒に考えていく過程を大切にすることで、自ら遊びを選び、考え、意欲的に活動できるということを改めて感じた。

6. 今後の課題

- ・今後も引き続き、子ども達が主体的に様々な環境に関わり、自分なりに考えたり、工夫したりして、自分の力で解決しようとする力や、自分の思いを友達に伝えたり、相手の思いを受け入れたりしながら、友達と一緒に困難なことも解決しようとする力を育てていきたい。